

現在、六日の政治焦点（日米安保）をめぐって、敵・権力は国会演説をひらすという政治的「無風化」策動と、自衛隊の治安出動を背後に控えさせた特勤隊の五千人配置をもって、なんとか切り抜けようとしている。一方學内においては、6月10日付「日本経済新聞」にあらわれたごとく「教官選考基準」を前にして、筑波移転反対教官3人の解任拒否や、23日に試験をぶつけてくるといった、以前にも増してシッコイ牽制が続出し、それにおびえた部分による“同意”（主觀的にはどうであれ、客觀的には権力に屈服している）の体系が日常利害を通じて形成されつつある。こうした、學内・外に限らない牽制－同意の形成の中で、筑波斗争を再度自分に引き寄せ、自己と他人の發展を得得しうとしている学友がいることを喜びをもって報告したい。そうした学友の一部として、ここに“68年度生有志”の手になる文章を許可を得たので転載し、多くの学生諸君に読んで検討してほしいと思います。（編集部）

## 安保粉碎！「筑波研究学園都市構想」解体へむかへ クラス・ストで起ち上ろう！（その一）

### I 農経68年度生における筑波闘争 (新入生との共通認識を勝取る為に)

#### —我々は何を求めて戦ってきたのか—

我々は何を求めて戦ってきたのか、また戦いざるを得なかつたのかをこの闘争をふりかえって把え直す中で思なる戦いの方針を求めていきたい。大學へ、大學へといつた流れ、それが一体何者であるかをふり返って考えることもさきないほど暗黒の愛撫生活。そして大學へ。大學に入つてまだそれが生者になじめない内に我々農経'68年度生は教育大の筑波移転という問題にぶつかった。「全學的な問題である教育大の筑波移転が一部の反対教官によって決定されようとしている」という危機意識をかきたゞられる中で我々'68年度生の戦いは“筑波移転決定に学生の参加を”が始まった。我々はまだ教育大の筑波移転がどのような社会的要請で登場して来たのか、そしてその本質は何なのかを明確に把える事はできなかつた。先に述べた意識のモビ「決定されんとしている教育大の筑波移転決定」を(67年6月10日に土地確保決定)阻止すべく我々の戦いは長期ストライキという形で強行されていった。ストライキの中での教官・先輩等との討議を通じ、あるいは自らの學習を通じ、そしてかたくなに我々との話し合いを拒否し続ける教大当時の姿を通じて、教大の筑波移転が、それまで語られてきたような単なる空間的な移転＝タコ足大學の解消といった問題以上のものがあるのを感じずにはいられなかつた。彼状ストライキが農草部において打たれていくなかで民青諸君は「大學の民主化」を語つた。だが一体「大學の民主化」とはいかなるものであるのか。それは大學の國家権力からの一定の独立性の獲得であり得なかつた。そして、それを語る以前の問題として「大學とは何か」「學問・眞理とは何か」という問題が必然的に生じて来た（我々の問題として）。69年に入り入試が実施されるか否かという問題が生じた時、それまで長期ストという方針を提起して来た民青執行部は「入試実施」の為スト解除を廃し、それまでの半年にわたる斗争を放棄していった。彼らは教大の筑波移転が教大のとりつぶしであることを語しながら「大學を守れ」という形で一切の斗争を放棄し、戦う学友に敵対していった。そのような混迷状況が學生の中に生じる一方、移転推進派の教官は日本学の正常化と発展を期する余地を創り、1月19日('69)に移転後の大學の姿として大學院大學構想を表わしてきた。それは自民黨の大學制度の改革案と同一のものであつた。そして教大の移転はこれに答えるものであることが明確になつていった。彼らは大學移転派及び政府・ブルジョアジーの改革とは言ひば「現在の大學を教育の場としての大學と、研究の場としての大學に分離する」ものであるが、それはともかく、日本帝國主義の振躍・帝國主義の相互の矛盾の激化の中で、すでにタコツボのような講座制度においては出来なくなつた能率の良い自主技術開発をめざす大學（大學院大學）と安くて良の良い労働力商品を能率よく生産する大學を造ろうとするものである。大學の帝國主義的理論は産業の合理化に対応するものであり、それらは資本に対する労働者の支配再編強化を意味している。我々はそこぞ筑波斗争の本質を(ウラ)

「大学の帝国主義的再編強化粉碎」にまで高めねばならなかつた。ニニぞ教官に目を転ずるなれば、彼らは彼ら自身の「学者」(それは研究筋労者にすぎない)としての仙別利害や講座の仙別利害に基いて移転を躊躇してきたのであった。ある者は移転をすれば何十億もの研究設備が手に入るから強引に移転をあしらひ、またある講座は移転後学部まで昇格できる可能性を筑波に夢みていた。そして反対派は東京から離れれば廻の良い学生が来なくなるとか、本ガチに入らちくちろとか立き奉をちらべて反対してゐたのである。先に述べたような状況の変化の中で、我々は筑波移転に反対してゐる教官との「移転反対」を共通利害として单纯な協同行動から、彼らに対して科学者として明確な筑波移転への反対論理を提出し、その中で筑波移転阻止斗争に起つことを要求してよう必要が生じて来たのである。この辺には、とりもなおさず皆さ自身の存在(階級的)への向いがあり、我々の眞理、学問に対する姿勢への厳しい向い画しだつた。そして我々は「大学の自決」が独立資本主義体制に並らゆる限りにありこのみ存在し得うのだと言う辯を、「大学の自決」の名の下に守られ追求された「眞理」が国民のものとはならぬ限りにありこのみ大学が在在するを認めんとする事と存在することを出来る事を知らされていくのである。(我々は眞理が人民に還元され、人民の血となり肉となり始めて眞理たりうるとどうえる)このよくなを斗争の中で獲得しここに恐怖した大学权力はアリバイ的な全學集会をデッテ土げ(89年2月27日 新大院公国)を翌日2月28日、学園から我々を抹殺隊をつかって暴力的に追撃してしまつたのである。そしてロックアウト一揆業再開といふ大学权力の斗争圧殺策動が我々をまちうけた。では再開される授業が何故に斗争圧をとり得るのであろうか。それは我々学生の存在か、一方にありては眞理を追求し、自己を發展させること、という側面をもうひとつ、資本の見えざる専横に答えて、自らを安くこすの良い労働力商品として形成していくという側面をもつ矛盾した存在だからである。現代資本主義社会にありて我々は唯一、自らを労働力商品として資本に売りわたすことによって生きてこそ事がざきるのである。すぐに学生はエリートとしての座を失なつてゐる。そして、その価値が下がれば下がらほど学生は親にせつづかれながら「学卒」というラレッテルを追いつけるのである。(そのことを意象化するにしろしないにしろ)「君」がなぜ大学に来たのか自問したとき、学生にその矛盾した二面があるならば学生に対する大學(そして教官)のものも其能にもその矛盾に対応する矛盾が存在するのも当然であろう。眞理(?)を追求し学生との相互關係の中で發展させたる主体としての一面と安くこすの良い労働力商品に学生を形成してゆく作業なりのもの(教育工場)というもう一つの面を有してゐる大学。我々はこの向「眞理の追求」(その具体的内容とは何かを完全に把えることはできなかつたが)という形でヨツコ来たが、単位、卒業といふ問題の中で自己の矛盾は激化してしまつた。それは88年12月段階ですでに4年生が卒業を前にしたが故に斗争を放棄してしまつたことがこの矛盾の激化を物語つてゐた。そしてそれは教大における「教育」の廻を物語つてゐると言えよう。そして民衆は「4年生の卒業を勝ち取った」などと言い、その矛盾を何うとらえ得なかつた。そして授業開始策動の本質をとらえる事のできぬ憲経教官達は内なるエネルギー論(授業の中でのみ、金なし、官嶋に反対できる力をたくわえてゆくという)をもつて、我々との學科会話をも牛耳り、授業を一方的に開始し、結果的に「官嶋体制」の強化に成功してしまつた。我々は決して「大なるエネルギー論」一般を否定するものではない。だが89年5月、6月段階にありては理学部の学友に對して僅めの1年を放棄することを善つた者のみ学内に入れ授業を受けさせる——(それは眞理の追求の場としての大学の完全な否定であり、大学を私業學校とするものである)攻撃がかかるとあり、多くの理学部の学友はこのように攻撃に對して自らの生存をかけて断固としてヨツコつたのである。我々は彼等と連帯して更にヨツコく為に、そして仙別利害をナラフさせた授業再開に對して自らの矛盾を斗争の中止場として前に授業ボイコットをヨツカねばならなかつた。残念ながら授業開始策動の本質を理解できぬ学友諸君の斗争放棄の中で我々の授業ボイコットをバネとしたヨツイは具体的な「力」を勝取つてゆくことがざきなかつた。だが我々はその中で「尊尚の解放は、唯一それを相う人間の解放の中にある」ことを学んだ。我々がこれから学んでいかねばならぬ「眞理」とは社会的存在であるところの、先に述べた学生の矛盾(それは学生に端的に表われたものもあるが労働者にありても言ひ得る矛盾——仙別労働力商品としての自己と、より人間らしく生きていける自己との矛盾といえよう)を止場させていく力であり、クラス活動やその他の運動の中で獲得してゆかねばならぬものの、自己の人間としての発展に対する「壁」として存在する仙別労働力商品としての利害とのリニス得る廻なのであることを学んだのである。(O.)